

後志管内の余市町に3年ほど暮らした。町一番の繁華街が黒川町。JR駅前からツカ工場を経て、余市宇宙記念館に続く国道沿いの一帯だ。その先に町役場がある。

『余市川右岸の黒川は黒田清隆北海道開拓使次官と宗川熊四郎惣取締の、左岸の山田は同じく開拓使の大山監事と黒田次官の姓のそれぞれ合成地名である』と『角川版日本地名大辞典』に記されている。「広く知られている定説を書き、新説・自説は遠慮して欲しい」が出版社側の編集方針。仁木町を含む余市郡の執筆を依頼された私にとっては、かなり不

本意な叙述になった。なぜか？

維新戦争で会津は徹底的に薩摩にいじめられた。父祖伝来の地を追われ、下北半島の荒れ地「斗南藩」に押し込められ、「逆賊流罪」の名目で明治2年小樽に送られた時の名は『会津降伏人』。兵部省の手で札幌原野開拓に向けられる予定だったが、翌年肝心の兵部省そのものが廃止され、行先不明のまま2年間も小樽で宙ぶらりんにされた。

災難続きだった会津武士団に、薩摩出身の樺太開拓使黒田次官が余市入植を世話した。小樽の開拓使本陣で武士団の血判書を受



北海道の地名と謎解き —— 余市の黒川 ——

け取ったのが大山莊太郎、入植した4年6月に宗川団長が命名した。賊軍が故郷の地名を公然と付ける訳にいかない時代だった。政府高官にあやかつて命名したとの口実

を考え付き、全員が口裏を合わせたのが会津魂。リングゴ武士との異名もある『筋縄でいかぬ』会津武士が余市にありと思うのは私だけなのか？

会津若松市に向いて神指町に残る黒川バス停を発見。会津史談会事務局長が「小原庄助さんの民謡で有名な東山温泉のある羽黒山。そこから流れる今の湯川は昔、黒川と呼ばれ、この付近一帯が

黒川庄でした。つまり、若松と改名する前は黒川。会津藩は北海道の新天地に故郷の古名を付けたことになりましたね」と言った。

北海道にアイヌ語地名があるとは言え、黒川はアイヌ語のヌブルベツ（水の色が濃い）が由来だとまていうのは行き過ぎ。第一、命名当時に黒川という川は余市になかったんだから。

本多 貢／ほんだ みつぎ フリーライター、「北海道地名の会」会員。1932年東京都生まれ。東京外語大卒。56年北海道新聞社入社後、本社学芸部、東京支社外報、政治経済両部などで記者活動を続け、92年同社定年退職。以来、フリーライター、北海道地名の会会員として活躍中。「雑学北海道 地名の旅」「雑学北海道 自然の旅」「アイヌ語地名ファンブック」などの著書がある。札幌市在住。

